

われら鍼夫のように

一カ月以上も前なのに、痴呆症に関するNHKのテレビ放送が妙にこびりついて離れない。その方面では有名な聖マリアンナ医大H教授の、「要するに痴呆は病気」の言葉を受けてアウンサー、「病気だから治りますね」。二人はそうです、そうですと結んだ。こんな安易な結論づけは空慰からなぐさめにもならない。病気だから治ることも治らないこともある。まして痴呆症は難病だ。

私たちの特養ホーム任運荘もほけた老人のお世話に明け暮れるが、治そうなどとは思わない。病人としての日々の生活を平穩に、そのためには人権を大切に守ることだけを考える。

えてして重度痴呆症の場合、病歴などがかくされて宅配のごとく送られてくる。Sさんを出迎え、手をとって導こうとするとギョツと悲鳴、形相が一変。手を縛られていた恐怖がよみがえったのだ。数月後少し落ち着き、不審そうに問う。「ここは部屋に鍵をかけないのかえ」と。入院していた病院を比べているのである。病気を見て病

人を見ていない医師を異常と告発しているといえる。

たしかに、ここでは正常と異常とが逆転している。

任運荘のすることは病人には一切逆らわないということだけ。彼女はせっかくの鉢植えの花をどンドン摘みとる。仕事のように。寮母がああと思わず声を出すと、「どげあるかえー」。そして美しいと独り言。大きな人形を抱いて寝るが、自分はベツドの端つこに。息子の名をつぶやく。一月もすると花摘みは止み、食事はひとりで出来ている。腰をかがめ「お上手ですね」と言う私に、口に入れかかったスプーンを差し向ける。満ち足りた乳児のしぐさそっくり。苦惱だけを刻んでいたあの顔はもうなく、鉦脈の輝きがちらほらする。

「ほけたお年寄りの異常行動はお世話の悪さから起こる」——寮母たちはこの戒めを背にきょうも坑道に立つ。

(一九八八年十二月二十一日)